

時流に抗う

表題と写真は朝日新聞 1 月 21 日のインタビューである。リードから一彼らは本気だ。安倍晋三首相は、夏の参院選で改憲勢力による「3 分の 2」の議席を目指すという。一方で、国会前を埋めたあの夏の熱気はいまも残っているのだろうか。岐路となりそうな 2016 年を私たち一人ひとり、どう生きるべきか。権力と個人の間を問いつける作家・辺見庸さんに聞いた。



「仮に安倍政権に退陣してもらったとしても、そのあとに何か良くなるというのが見えません。安保法制で次のレールは敷かれてしまった。描いてい

るのは、憲法をもっと融通無碍なものにする緊急事態条項ですよ」「ひょっとしたら、いまは安倍政権の退陣を求めているような勢力さえも、そういうレトリックに乗ってしまうんじゃないでしょうか。例えば尖閣列島、あるいは北朝鮮をめぐる動きしだいだね。全体として翼賛化していくかもしれないと見ています」

「ぼくは、未来を考えるときは過去に事例を探すんです。むしろ過去のほうに未来があって、未来に過去がある。そういうひっくり返った発想をしてしまう。いまの局面をなぞらえるとしたら、すべてが翼賛化していった 1930 年代じゃないですか？ 南京大虐殺が起きた 37 年前後のことを調べて、つくづく思いました。人はこうもいとも簡単に動員されるのか、こうもいとも簡単に戦争は起こるのか—と。現時点で、もう 37 年と同じような状況に入っているのかもしれない」

「戦争法(安保法)なんて、突然降ってわいたみたいに思われるけど、長い時間をかけて熟成されたものですよ。A 級戦犯容疑の岸信介を祖父に持つ安倍(首相)は、昭和史をいわば身体に刻み込んだ右派政治家として育ってきたわけでしょ。良かれあしかれ、真剣さが違いますよ。死に物狂いでやってきたと言っていい。何というか、気合の入りが尋常じゃない。それに対して、野党には『死ぬ覚悟』なんかないですよ。これからもそうでしょう。だからやすやすとすべてが通っていくに違いない。むっとされるかもしれないけれども、国会前のデモにしても『冗談じゃない、あんなもんかよ』という気がしますね」

辺見さんらしい厳しい指摘が続くが、今の民主党などの姿勢を見ていると、こうした危機感も理解できる。過去から学び、もっと危機感をもち、主体的に行動するしかない。

(2016 年 1 月 26 日)